白銀南中

生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫

～必要感をもって問題解決に取り組ませる指導をとおして～

（３年計画の１年次）

校長　沼 上　進 一

１　研究主題について

本校では昨年度までの３年間「目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成」を校内研究の研究主題とし、課題設定の工夫・振り返りの工夫・キャリア教育の視点との関連を図った授業づくりに取り組んできた。その結果、昨年度の生徒アンケートでは、「その時間の学習目標や、将来どんなことに役立つのかを意識して授業を受けた」、「話合い活動に参加し、積極的に意見を伝え合った」の２つの項目において、４段階評価の３もしくは４を選んだ生徒の割合が全ての学年で概ね 90%に届く値となり、これまでの研究で一定の成果を得られたと考えている。

また、一般研修では、学習指導を支える生徒指導・生徒理解の研修を深めるべく、外部講師を招いた研修を実施した。これらも生徒指導･生徒理解に関する視点を広げる大切な機会となった。

一方で学校評価アンケートの結果から「目標をもち計画的に学習している」ことについては、４段階評価の２または１で回答していた生徒が 20%、教員が 50%という結果であった。これは、生徒にとって、適切な目標設定の仕方とそれを達成するための手立てを学ぶ場面や学びに対する価値や意義を考えたり、学びを振り返ったりする場面が少なかったためではないかと考えられる。

そこで今年度は、生徒が学びに対する「必要感」をもち、「主体的に学習に取り組む」ことにつながる授業づくりを目指し、研究主題を上記のように設定した。また副題は、生徒の興味・関心を喚起できるような課題設定や導入におけるはたらきかけを工夫し、自ら問題を解決しようとする態度につながるよう「必要感」や「問題解決」という文言を取り入れた。生徒にとって「必要感」がある「問題解決」的な学習を授業の核とすることで、生徒の主体性や自己調整力を育むことができるのではないかと考える。

２　研究のねらい

問題解決的な学習を取り入れた授業づくりをとおして、生徒に必要感をもたせ、主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てる。

３　研究仮説

生徒が必要感をもつような課題設定を工夫することや問題解決的な学習を取り入れた授業を行うことで、学びに対する興味・関心を喚起し、生徒の主体的に学ぼうとする態度を育てることができる。

４　研究の内容

次に挙げるいずれかの視点に基づき、問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを目指す。

(1) 生徒が自ら問いをもち、課題解決に向かう意欲を喚起するような「必要感」のある課題設定や導入におけるはたらきかけの工夫。

(2) 生徒が自ら課題や問題に向き合い、解決のためによりよい方法を見つけようとする意欲を喚起するような「問題解決」場面の設定。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	内　　容
４	５	全体会（研究についての共通理解）
６	１	小中ジョイントスクール推進事業　本校職員による、小学校の授業参観
１０	４	中教研教科授業公開 第２回授業研究　（英語・３学年）　授業者　教諭　葛西　良子 （技術・１学年）　授業者　教諭　木村　和光 （保体・２学年）　授業者　教諭　大渡　恵子 教諭　嶋守健太郎
１１	２	中教研　領域（視 聴 覚）問題提起者 教諭　木村　和光 （キャリア）問題提起者 教諭　川村　　真
１１	９	小中ジョイントスクール推進事業　小学校職員による、本校の授業参観
１１	２５	教科部会（今年度の成果と課題）
１	１８	全体会（成果と課題、次年度の研究主題について）

「わかる授業づくりのための５つの視点」のアンケートは月末に実施。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	２７	配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解
５	２４	「１人１台端末に係る研修」講　師　木村　和光　教諭
７	６	「『主体的に学習に取り組む態度』どう評価する？」講師　葛西　良子教諭
７	２８	学級経営に関する研修「教育相談の視点を活かした学級経営」(QU 分析) 講師　こども支援センター　教育相談員　原　　寿　氏
１２	７	「心のケア研修」講師　八戸学院大学短期大学部　野口　和也　教授
１	１０	学級経営に関する研修「QU 分析を活かした学級への手当ての考察」 講師　こども支援センター　教育相談員　原　　寿　氏

６　研究の成果

(1) 研究主題「生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫」についてアンケートを実施したところ、職員の 70.6%が高評価であった。具体的には、「生徒が興味をもてるような課題提示の仕方や文言の工夫ができた」、「ICT・１人１台端末・視覚的教材の積極的な活用ができた」、「学習の見通しと振り返りの習慣づけができた」、「教え合いや学び合いの時間を設定することで生徒の意欲が向上した」、「場面設定や学習形態を工夫することで活発な活動につながった」、などの回答が挙げられた。

(2) 副題「必要感をもって問題解決に取り組ませる指導をとおして」については、58.8%の職員が高評価であった。「『なぜ～なのか』と理由を考えさせると意見が活発に出た」、「目的・場面・状況を必ず設定して言語活動を行ったことで、主体的な生徒の活動につながった」、などの回答があった。

７　研究の課題

主題を受け、各教科において積極的な取組が行われた一方で、授業において「必要感」の捉えについて教員間で共有できていなかったために、具体的な実践まで到達できなかったという反省点もあった。そこで来年度は、授業における「課題設定の工夫」に重点を置いて授業改善に取り組む。生徒が自ら「問い」をもてるような課題設定や、導入部分におけるはたらきかけの工夫を行うことで、生徒の「主体的な学び」の実現を目指すとともに、「支援者」としての教員のあり方についても探究していきたい。

（記入者　関川　昌志）